**日本スラヴ学研究会2014年度シンポジウム**

**「いま読みたい中東欧の現代文学」**

**2014年6月14日（土）専修大学・神田キャンパス1号館　204教室　13:30～17:00**

**（1）原田義也（ウクライナ）**

**「現代のマドンナは何を祈るか――詩人リーナ・コステンコの世界観」**

女流詩人リーナ・コステンコ（1930～）は、現代ウクライナ文学における文字通りの「生

き証人」である。60年代人の先駆けとして詩集『大地の光』（1957）で文壇にデビューしてか

ら現在に至るまで、その不羈独立の精神が批判の対象となって彼女の存在が公的な文学界から抹

消された1960年代から1970年代にかけての「沈黙の期間」を含め、半世紀以上にわたって時

代と世界を見つめ、創作を続けてきた。今回の報告では、近年の講演やインタビュー記事に表コ

たコステンコの言説を彼女自身の作品世界に重ね合わせながら読み解くことで、現代ウクライナ

文学におけるコステンコの立ち位置、および文学の使命とは何かという普遍的な問いに対する彼

女の見解を再確認してみたい。

**（2）小林久子（アルバニア）**

**「イスマイル・カダレ〜『死者の軍隊の将軍』と『夢宮殿』における土着性と寓意」**

アルバニア文学を代表する作家イスマイル・カダレの作品の中から、『死者の軍隊の将軍』（1963）と『夢宮殿』（1981）の二作品を取り上げる。カダレをヨーロッパに知らしめることになった『死者の軍隊の将軍』における、アルバニアの土着性と、社会主義体制下における政治的テーマの扱い方に言及する。また、『夢宮殿』では、しばしば「カフカ的迷宮世界」と評される作品構成について、カフカの『城』との比較的観点からの所見を述べる。

**（3）栃井裕美（セルビア）**

**「セルビアのユダヤ系作家ダヴィド・アルバハリ」**

ユーゴスラヴィア（現セルビア共和国）の文壇に70年代に登場したユダヤ系作家ダヴィド・アルバハリ（David Albahari）の紹介。ナボコフやピンチョン等の翻訳家でもありながら、作家となりポストモダン時代の旗手として活躍した。1994年からカナダへ拠点を移しながらもセルビア語で執筆を続けている。歴史と言葉に対峙し続けることとなった彼の人生と、その作家像を紹介したい。

**（4）櫻井映子（リトアニア）**

**バリース・スルオガ『神々の森』――強制収容所を舞台にした悲喜劇――**

　今回の報告では、現代リトアニアを代表する詩人・作家の一人、バリース・スルオガの実体験に基づく自伝的小説『神々の森――回想録』（1957）を、作家の人生と当時の時代背景を踏まえて紹介する。バルトの神々伝承の地に出現したナチス・ドイツの強制収容所を舞台に、「悪魔にも似た住民たち」によって繰り広げられる悲喜劇を、シニカルかつユーモラスに描いた本作品は、その後のリトアニア文学に大きな影響を与えた。人間性の喪失という極限状況において唯一の武器たる「理性による笑い」の解釈を中心に、我が国ではこれまで殆ど紹介されてこなかったリトアニア文学の魅力を伝えたい。

**（5）小椋彩（ポーランド）**

**「オルガ・トカルチュクを読む」**

**（6）木村英明（スロヴァキア）**

**「スロヴァキア語で表す＜いま・世界＞」**

1989年の体制転換以降に活躍し始めた一連の作家には、それぞれ現代文学に広く共有されるテーマ（共同体の崩壊、民族間の軋轢、歴史と記憶、暴力、性、越境等々）を扱いながら、スロヴァキア語で書くということに付された意味の「歴史性」を解体的に問い直そうとする独特な傾向が伺われる。この点に着目しつつ、日本語・英語に翻訳されている（したい）作品数編を取り上げ、作家たちがスロヴァキア語で表現しようとする＜いま・世界＞の一端を紹介したい。

**（7）阿部賢一（チェコ）**

**「都市、記憶、移動－－２１世紀のチェコ文学から」**

「都市」「記憶」「移動」をキーワードにして、Ｍ・アイヴァス、Ｊ・クラトフヴィル、Ｔ・ズメシュカル、Ｍ・シュマウスら、現代作家の作品を読み解いていく。

**（8）コメンテータ解説およびディスカッション**

コメンテータ：沼野充義、司会：越野剛